安楽寺寺報

聞光

第６０号
降誕会号
２０１１/８/１

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL0823-21-7561

親鸞に学ぶ生き方

信楽峻麿

釈尊が、私たち仏教徒の社会的な生き方として教えたものに、「同事」ということがあります。それは相手と同じ立場に立って、相手のために協力し、その利益をはかることをいいます。たとえば、母親がわが子にスプーンで何かを食べさせる時に、「アーンをしなさい」といいながら、自分もまた同じように口をあける、というような動作をすることをいうわけです。

親鸞の生き方にも、そのような「同事」ということが、うかがわれるところです。すなわち、その『唯信鈔文意』において、中国の元照の『阿弥陀経義疏』の、「屠沽の下類」という文を引用、解釈するについて、

れうし、あき人さまざまのものは、みな石、かわら、つぶてのごとくなるわれらなり。

と書かれております。当時は猟師（屠）と商人（沽）は、社会のもっとも底辺に屈するものとして、世の人々からは、石、瓦、つぶてのように、まったく価値のないものとして、さげすまれ、差別されていたわけです。しかしながら、親鸞は、そのような猟師と商人について、「われらなり」といっています。親鸞は、別に猟師をしたことも、商人をしたこともありませんが、その人々を名ざして「われら」といわれるわけです。

ここには親鸞が、深い共感と連帯の思いをもって、そういう被差別者たちに、「同事」していることが、よくうかがわれるところです。

今年（二〇一一）の三月、東北地方を襲った大地震と津波、そしたまたそれによる人災としての東京電力の原発問題は、まことに悲惨きわまる状況を惹起しましたが、それに対して、私たち親鸞の教えを奉ずる真宗教団はどう対応し、いかに行動をおこしたでしょうか。真宗教団は今年は親鸞聖人の七百五十回の遠忌法要だということで、そのような惨事

かつて戦後まもまく鈴木大拙氏が今日の本願寺の如きものは祖聖の志を相去ること実に幾千万由旬である。本山の祖師堂には愚禿は居ない。一人の親鸞は、―もしそこにおわすとすれば―灯影裡で泣いてござるに相違ない。（『日本的霊性』）

といって、痛烈に批判しましたが、そのことは今もなお、そのまま通用するのでしょうか。まことに悲しいかぎりです。

親鸞は私たち真宗者の生き方について、「信心のしるし」を生きよと教えられています。その「しるし」とは証拠ということです。念仏を申し浄土をめざして生きるものとしての、確かな証拠を見せて欲しいと言われるわけです。まことに厳しい教訓です。

今日即今における「信心のしるし」とは何を意味するのか。私たち真宗者はその一人ひとりが、自己責任として、心をひそめてその「信心のしるし」の内実を尋ねつつ、確かに自立して、たくましい行動をおこしてゆきたいものであります。

人形遣い安藤けいーさん来呉

８月２日（火）西教寺蔵本支坊にて合同子ども会を開催しました。そこにNHKの「ひょっこりひょうたん島」や「新・三銃士」の主役安ダルタニアン役をしておられる、人形遣い安藤圣一さんにお越しいただき、ジャータカ物演語の「王さまとハトとタカ」他２話を初上演していただきました。（京都から本願寺新報も取材に来ました）

一人四役も兼ねながら、素晴らしい人形使いと、楽しいお話しに、すっかりすてきな子どもたちと合唱会も引きいきいまいました。

この外、安楽寺（8/3）、浦信楽寺（8/3）、夏の集安楽寺（8/3）、宝徳幼稚園（8/4）を円上回られ、「弁上いのなみだ」もさの演してくだいます。

冤罪（えんざい）

7月14日の中国新聞に『懲役10年確定へ―東広島女性死亡　最高裁上告棄却―』と飯田眞史さんの訴えが棄却されたことが掲載されました。「殺意を認めるには合理的な疑いが残る」という結論を出したにもかかわらず、疑いを残したまま、実刑の判決を出しました。「疑わしきは被告人の利益に」という原理原則は全く守られていません。殺意も不明、凶器も不明、動機も不明のまま懲役10年です。

飯田さんから「日本司法は三審に渡り、真実を見抜けず、なぜ犯罪には一切関わっていない人間を犯罪者に仕立て上げたいのか、怒りで一杯です。」「日本の司法制度の中で戦わねばならないと改めて決意しているところです。」とお手紙をいただきました。

次々と明らかになる冤罪事件。司法、検察には大きな問題があります。下記アドレスは東京から飯田さんを支援して下さっている片岡健氏がつくられた事件のＨＰです。パソコンがあれば是非みてみてください。また身近な人にも見てもらってください。私たちもこうした現実に触れ、少しでも多くの人の関心が集まれば、何かがかわると思います。

http://truthishere.net/higashihiroshima.html

安楽寺マンガ通信

（第１４回）

信楽めぐみ作

聞思

地球と人間

信楽晃仁

先日「地球が制止する日」というキアヌ・リーブス主演の映画がテレビで放映されました。

内容は、今私たちの住んでいる地球が環境破壊等によって、危機的な状況にあり、この美しい地球の命が危ないというのです。その原因は人間が地球環境を破壊し続けていることにあり、大切な地球の命を脅かしているのが人間だと。そしてこの地球の命を守るために地球に巣くう病原菌とおぼしき人間を排除する、という宇宙人がやってくるのです。人間も負けじと応戦しますが、全く歯がたちません。そしてとうとう人類を排除するシステムが動き始めます。しかし、その宇宙人と心を通わすことができた女性科学者が、人間のすばらしさ、優しさを伝え、人間は必ず、思いを変えこの地球を守って行くという約束をすることで、最後にその宇宙人がわが身を犠牲にして、その人類排除のシステムから地球人を守るという物語でした。

三年前ぐらいになりますが、この映画にあるテーマを取り上げて、テレビで特集を組んだことを思い出しました。それは、もし地球に人間がいなくなれば地球はどうなっていくのか。そのシミュレーションをするのです。それは人間がいなくなった後の地球の変化を早送りで見ていくと（一〇年単位を数秒で見ていくと）人間の作ったものはどんどんと崩れていきます。コンクリートなんてすぐに崩れ去ります。頑丈な家を建てたように思っても、コンクリートの耐用年数は四〇年～六〇年。数百年があっという間に流れる映像だと、砂の城がくずれるようにくずれていくのです。人間のつくったものはどんどんとくずれていき、逆に木はどんどんと生えて大きくなり、あっという間に地球全体が緑の森になっていくのです。

この七月終わりに呉市の私立幼稚園の園長で鹿児島の川内幼稚園という幼稚園を視察見学に行きました。その幼稚園の中には森があるんです。木々が茂り、そしてその中には大きな石を入れて、川が流れて、素晴らしい森でした。その園長先生が、「人間のつくったものはくずれてなくなるけれど、森はほっとけば大きくなる。そのことに気付いたとき、これはおもしろいと思って、園庭の一部を森にすることにした」と言われるのです。「な～もの森」と名付けられていました。

なるほど、私たちは木を植えているけれども、人間がいなくなればほっといても木は生えていきます。夏のお墓を見れば一目瞭然です。

テレビの特集から見えたのは、なくなっていくのは人間のつくったもの。大きくなっていくのは木々や森。そして残っていくのは石でした。

さて、話を元に戻しますが、地球を助けるために人間を除去する。まるで、人間がガン細胞を切除したり、放射線治療でガン細胞をやっつけて人間の命を守ろうとするように、外から見る宇宙人には、地球が大きな生命体で、その地球の命を人間というガンがむしばんでいると見えるのでしょう。オゾン層の破壊や、環境破壊、またこの度の原発の問題と、人間中心主義で、人間の欲望を満足させる事を一番に求めるために、地球の命を危険に晒（さら）しているのです。考えてみればその通りだと思います。

三月一一日に発生した東日本大震災後、東日本では未だに地震が続いています。みんな不安の中で生活しているというお手紙を千葉の幼稚園の先生からもいただきました。

なんでそんなに大地は揺れ続けるのか。私たちは大地と言えばドシッとして、動かないものの代名詞のように考えてきました。その大地が揺れ続けるという、今までに思いもよらなかったことです。

それはやはり、地球は生きているからだと思うんです。私たちは風邪を引くと咳が出ます。この咳もひどくなると止まらなくなります。自分の咳一つ止めようと思っても止めることができないのが私の身体です。地球も同じです。地震は地球の咳のようにも思えます。空気は汚れ、水は汚れ、オゾン層は破壊され、自然は破壊され、その上、私たちの生活を便利にするために使った原発の廃棄物は地球の奥深くに埋められて、一〇〇万年その放射能を失うことなく、それを管理しなくてはならないといいます。環境も悪く、体内にも毒が入っていれば、咳が出ても仕方ありません。身体の中から悪い物を出そうとして自然に咳は出ます。地球も同じだと思うのです。

この「地球が制止する日」が現実となってもおかしくありません。宇宙人が来ずとも、何れこのまま行けば人間は地球もろとも滅びるのではないかと思います。映画の中で女性科学者が誓ったように、人間は生き方を変えなくてはなりません。その一つの方法が仏教にはあります。

人間が欲望に忠実に生きる時、必ず自らを破滅へと導きます。そのことを仏教はずっと地獄の思想で伝えてきました。

この世が地獄にならないことを願いつつ、原発、原爆のことを考える夏にしたいものです。

あるホスピス病棟で末期ガン患者が作った詩があります。ほんわかした中に私たちに大切なことを教えてくれる詩だと思います。お味わい下さい。

安楽寺法要案内

九月	彼岸会	日時　９月１８日（日）朝・昼 講師　五日市 光乗寺　渡邊幸司師 テーマ　「いのちを生きる」
一〇月	顕真永代経	日時　１０月２２日（土）朝・昼 講師　浄念寺　瀧山憲明師 テーマ　「救いとはどういうことか」
一一月	成道会	日時　１１月１２日（土）朝・昼 講師　宝徳寺　平原弘史師 テーマ　「浄土とはどんなところですか」 ※成道会と報恩講が入れ替わっています
一二月	報恩講	日時　１２月３日（土）朝・昼 １２月４日（日）朝・昼 講師　信楽峻窟前住職 テーマ　「なぜ念仏で往生できるのか」

「ガン君に語りかけてみた」

お腹に手を当ててガン君に語りかけてみた。

「どうしてそんなに頑張って大きくなろうとするんだ？寄生先のボクの生命を奪ってしまえば結局君も死んで、元も子もなくなることはわかっているんだろう。もう少し考え直したらどうか。ほどほどに大きくなるとか。いっそ小さくなって長く生きのびるとか。」

でもガン君は沈黙したままだ。仕方がないので

「君が黙っているならしょうがない。ボクはこの方面ではプロのドクターに教えられ、君に正面攻撃ではなく、からめ手から攻めるから注意しておくように」と捨てぜりふを言った。

沈黙のままボクは

「君が大きくなってボクの細胞も生きていけなくなったとき、ともに死のう。その時ボクは救い主によって永遠の命を与えられるから、君にありがとうを言わなければならない。君はどこへ行くんだい？君も天国に来たいなら、生きているうちに、自分の無力を知って、神に身体をあずけたらいいんだよ。」

とそっと言った。お腹に当てている手がちょっとふるえたように思えた。